

薬学部
人文社会学部
ヒューマンケア学部
健康メデイカル学部
健康医療スポーツ学部

学 力 試 験
国 語

試験開始の合図があるまでに、次の注意事項をよく読んでください。

- 一、試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないでください。
- 二、解答用紙は、マーク用解答用紙と記述用解答用紙が両面に印刷されています。マーク式の問題はマーク用解答用紙に左記の例のようにマークしてください。

(例)

解答	1	2
①	○	○
②	○	○
③	●	○
④	○	○
⑤	○	○
⑥	○	○
⑦	○	○
⑧	○	○
⑨	○	○
⑩	○	○

※同じ解答欄に複数のマークをすることもありません

記述式の問題は記述用解答用紙に記入してください。

- 三、机の上には、受験票・鉛筆・シャープペンシル・消しゴム・鉛筆削り（電動式は除く）・時計（時計機能だけのもの）・眼鏡以外のものは置かないでください。
 - 四、問題・解答用紙の両方に必ず受験番号・氏名を記入してください。また、受験番号をマークしてください。提出の前には記入漏れがないか再度確認してください。
 - 五、問題は3問全問解答必須です。
 - 六、試験中に問題冊子の印刷不鮮明・ページの落丁・乱丁に気付いた場合、また問題の内容について質問などのある場合には、手を挙げて監督者に知らせてください。
 - 七、問題冊子の余白等は適宜利用して構いません。
 - 八、配布された問題・解答用紙は試験終了後回収しますので、持ち帰らないでください。
- ◇携帯電話は、電源を切ったうえで鞆の中に入れてください。

志望学科・コースの上枠に○をつけてください（第一志望のみ）

受験番号		志望学科・コース													
氏名	薬学部														
	薬学	人文社会学部	ヒューマンケア学部	健康メデイカル学部	健康医療スポーツ学部	薬学	人文社会学部	ヒューマンケア学部	健康メデイカル学部	健康医療スポーツ学部	薬学	人文社会学部	ヒューマンケア学部	健康メデイカル学部	健康医療スポーツ学部
	経営コース	メディア文化コース	福祉コース	保育・幼稚園コース	小学校・特別支援コース	人文社会学部	経営情報コース	観光経営学科	看護学科	言語聴覚学科	理学療法学科	救急救命士コース	臨床工学コース	スポーツサイエンスコース	看護学科

「問題二」 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ずつと気になっていたことがある。それは、なぜサルたちは私たちのように群れを自由に出入りしな
いのだろうか、ということである。

サルのオスもメスも、思春期になるまで決して群れから離れない。子どもが群れからいなくなれば、
ほとんどそれは死を意味する。多くのサルたちでは、オスは成長すると群れを出ていくが、メスは自分
が生まれた群れにとどまり、子どもを産んでいく。メスが群れを出て行かないのは、出産や子育てをす
るうえで外へ出て行くことがはなはだしく不利になるからだ。

人間に近い類人猿は、サルとは逆にメスが群れを渡り歩く。ゴリラのオスは思春期に群れを離れるこ
とが多いが、他の群れに加入することはない。チンパンジーのオスは一生自分の生まれた群れから離れ
ない。性の季節は **ア** では **イ** に、 **ウ** では **エ** に、親元を離れて血縁関係のないパ
ートナーを作るように働きかけるのだ。

奇妙なことに、サルも類人猿も一度群れを離れると、めったに元の群れへ戻ることはない。それは、
群れに戻ろうとすると、元の群れの仲間たちから攻撃を受けて追い出されてしまうからである。おそら
く、そのサルが不在の間に新しい社会関係ができてしまい、元の関係に戻れなくなってしまうからだ
と考えられる。いったん群れを離れたゴリラのオスが元いた群れと接触すると、父親や兄弟のオスから強
い反発を受けるし、チンパンジーのオスは数週間姿を消しただけで、元の仲間から一斉攻撃を受けて殺
されることもある。サルや類人猿の社会では、不在は **X** を意味する。不在の後、元の社会関係を
修復することは **a** シ難の業なのである。

サルや類人猿と比べると、人間は何と **Y** を作ってきたことか。私たちは日々さまざまな集団を
渡り歩いて暮らしているし、**I** 数十年の不在もまるでなかったかのように受け入れてもらうことがで
きる。ただ、それはおそらく最近の人間社会がやつと到達できた仕組みなのではないだろうか。日本で
も近年まで住んでいる土地を離れるには **Z** が必要だったし、各都市には関所が設けられて出入り
が厳しく監視されていた。私がゴリラの調査をしていたアフリカの熱帯雨林では、街道沿いの村の真ん
中に壁のない休み場所が設けられている。旅人はそこにまず腰を下ろして自分の **b** 素ジヨウを述べる。
村人はそれを聞いて、群れへの滞在や先へ進むことを許可する。出される飲み物や食事はその判断の結
果である。危険と思えば、毒を盛ればいい。文字のない世界で暮らしてきた人々にとって、旅人は外の
世界とをつなぐ情報源であると同時に、村に **c** 災ヤクをもたらす源泉でもあるからだ。

そのため、一度出ていった仲間が戻ってきたときも、同じような扱いを受ける。外の世界で何を身に
つけてきたかを **d** 精サする必要があるからだ。ただ、人間は不在の日々があつても親族や幼なじみに
頼れるので復帰は困難ではない。人間には元の関係を今の関係に反映させる能力がある。言葉によつて
不在の仲間のうわさをし、まるでそこにいるかのような扱いをすることができるのだ。父親が長期に海
外へ出張しても、食卓にその席は刻印されており、衣服や趣味の品々が父親の存在を常に示し続ける。
何より、父親に関するうわさが絶えないことが父親を不在のまま温存することにつながる。父親に限ら
ず、大切な仲間を物によつて記憶し、うわさにすることで私たちは不在を黙認し、関係の断絶を留保し
てきたのではないだろうか。

ところが、昨今の人間社会は次第に不在を許容できなくなっているように私は感じる。常に顔を合わ
せていないと仲間外れにされたり、携帯電話をオンにして仲間からの問いかけに即座に応じなければ、

友だちから拒否されたりするような e 閉サ的な感性が育ち始めている。人間の信頼が、過去ではなく現在の関係によってしか得られないという極めて短絡的な思考がまん延しているような気がする。それは人間の歴史に逆行し、Ⅱ サルの社会に戻ることだと私は思う。不在を許容し、自在に集団を渡り歩けるからこそ、人間は複雑に分化した社会を築くことができたはずなのだ。IT時代の信頼関係の作り方を、過去を参照してもう一度考え直すべきではないだろうか。

（山極寿一「不在を許す心」（『毎日新聞』二〇一五年 五月十日「時代の風」）より）

問一 傍線部 a ～ e のカタカナの部分と同じ漢字を含む熟語を、次の中から一つずつ選び答えなさい。解答は a ～ e の順にマーク用解答用紙の [1] ～ [5] にマークしなさい。

- | | | | | |
|------|------|------|------|------|
| ① 詐称 | ② 慕情 | ③ 至急 | ④ 落差 | ⑤ 禁忌 |
| ⑥ 品性 | ⑦ 厄介 | ⑧ 諮問 | ⑨ 踏査 | ⑩ 連鎖 |

問二 空欄 [ア] ～ [エ] に入る最も適切な語を、次の中から一つずつ選び答えなさい。解答は ア～エの順にマーク用解答用紙の [6] ～ [9] にマークしなさい。

- | | | | | | |
|------|-------|------|---------|------|------|
| ① サル | ② 類人猿 | ③ 人間 | ④ 子どもたち | ⑤ オス | ⑥ メス |
|------|-------|------|---------|------|------|

問三 空欄 [X] ～ [Z] に入る最も適切な語を、次の中から一つずつ選び答えなさい。解答は X～Zの順にマーク用解答用紙の [10] ～ [12] にマークしなさい。

- | | | | | |
|----------|---------|----------|---------|------------|
| ① 短絡的な思考 | ② 社会的な死 | ③ 閉塞的な社会 | ④ お上の許可 | ⑤ 許容に満ちた社会 |
|----------|---------|----------|---------|------------|

問四 傍線 I に「数十年の不在もまるでなかったかのように受け入れてもらうことができる」とあるが、このようなことが可能となる理由を、本文中の言葉を用いて三十字以内（句読点・記号等も字数に含む）で答えなさい。解答は「記述用解答用紙」に解答しなさい。

問五 傍線Ⅱに「サル社会に戻ることだ」とあるが、「サル社会」の説明として適切でないものを、次の中から一つ選び答えなさい。解答はマーク用解答用紙の13にマークしなさい。

- ① 不在の間に新しい社会関係ができてしまい、不在前の関係に戻れなくなる社会
- ② 各都市には関所が設けられ、出入りが厳しく監視される社会
- ③ 信頼が過去ではなく現在によってのみ得られる社会
- ④ 外の人間に対して疑心を向ける社会
- ⑤ さまざまな集団を渡り歩いて暮らすことのできる社会

問六 本文中において筆者が論を進めていく際の特徴として最も適切なものを、次の中から一つ選び答えなさい。解答はマーク用解答用紙の14にマークしなさい。

- ① 主張に説得力をもたせるために、予想される反論を挙げ、更にそれに対する意見を述べている。
- ② 冒頭の「問い」を受け、その「問い」の答えを明らかにするように論全体が展開されている。
- ③ 主張に説得力をもたせるために、客観性の高いデータを提示している。
- ④ 読者の理解を促すために、冒頭と終末の部分で主張を述べている。
- ⑤ 趣旨や内容を捉えやすくするために、対比を用いて論じている。

問七 本文の内容・趣旨として適切ではないものを、次の中から一つ選びなさい。解答はマーク用解答用紙の15にマークしなさい。

- ① 人間は、物やうわさを通じて不在の仲間を記憶し続けることができる。
- ② サルや類人猿は一度群れを離れると元の群れに戻ることが難しい。
- ③ 現代の人間社会では、不在を許容する能力が低下している。
- ④ ゴリラのオスは思春期に群れを離れることが多いが、他の群れに加入することはない。
- ⑤ 常に連絡を取り合うことが求められる現代の風潮は、人々にとってストレスとなり、関係の断絶を招く可能性がある。

【問題二】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお本文中の□、○は段落番号である。

□ 人間が言葉を用いるのではなく、人間が、言葉の通路になる。奇妙に聞こえるかもしれないが、そうしたことはたしかにある。その a 証サを石牟礼道子（一九二七）の『苦海浄土わが水俣病』に見ることができる。

□ 水俣病は、有機水銀が原因となった公害病である。当時、熊本県水俣市に拠点を構えていたチッソ株式会社は、戦後ほどないころから、工業排水が有機水銀を含むことを知りながら、水俣の海、不知火海に放出を続けた。そればかりか、患者が続出し、有機水銀が原因であることが疑われてもチッソは、排水を止めなかった。

□ 『苦海浄土』が発表されたのはその翌年一九六九年である。世の多くの人びとは、この作品によって始めて、水俣病の一端を知ることになる。第一稿は一九六〇年に発表され、およそ九年の歳月を費やして完成された。

□ 最初に記されたのは、単行本となったときの第三章「ゆき女きき書」だった。「ゆき」とは水俣病に襲われたひとりの女性の名前である。四十歳を過ぎた彼女は夫と共に漁をして暮らしていた。彼女は残滓のように残った力で石牟礼にこう語った。

□ 「う、うち、は、く、口が、良う、も、もとら、ん。案じ、加え、て聴いて、はいよ。う、海の上は、ほ、ほん、に、よかった」。自分はもう十分に口が利けない。すまないがそう思っただけで聞いて欲しい。海での生活は本当に幸せだった、という。ゆきは b ウラみ言をいうのではなく、自分の幸福をかみしめる。元の身体になって、もう一度海に戻りたい。それだけが彼女の願いだった。I こうした言葉は知解されることを拒んでいる。表記文字の奥に潜む律動を感じることを求める。

□ 水俣病は、汚染された海で獲れた魚を食べたことに起因する。人災はまず、海をもっとも愛した者たちの生活を壊した。病院にいた石牟礼は、言葉になろうとしない数知れない同質の呻きを聞く。『苦海浄土』に記された出来事は、死にゆく人々との無言の交わりに始まったと石牟礼は書く。

わたくしは彼女のベッドのある病室にたどりつくまでに、幾人もの患者たちに一方的な出遭いをしていた。一方的なというのは、彼らや彼女らのうちの幾人かはすでに意識を喪失しており、c カ口うじてそれが残っていたにしても、すでに自分の肉体や魂の中に入りこんできている死と否も応もなく鼻つきあわせになっていたのであり、人びとはもはや自分のものになろうとしている死を
□ア□と見ようとするように、散大したまなこをみひらいているのだった。 (『苦海浄土』)

□ 言葉を奪われた者たちが発する「言葉」がある。言葉を奪われた者だけが発することのできるコトバがある。それは、すでに言語の姿をしていない。裸形の意味となつたうごめきである。

□ 表層意識上では、すでに活動は見られない。身体も自由にならない。だが、苦しむ姿は雄弁に水俣病の現実を物語っている。そこに石牟礼は、無尽のコトバを「読む」。この出来事は彼女に書くことを促す。それはほとんど強いるといつてもよい経験だった。

□ 作品を書くことを通じて、II 言葉をコトバの次元に深化させること、あるいはコトバとして顕現した言葉にならない魂の叫びを言葉に刻みこむことを、自分は託されているのだと石牟礼は感じる。彼女は作家になりたかっただけではない。この III コトバとの遭遇が彼女を書き手へと変貌させたのである。

□ 病院には釜鶴松という男性がいた。彼も水俣病に罹患していた。「死につつある人びとの中にまじり、彼はベッドからころがり落ちて、床の上に仰向けになっていた」(『苦海浄土』)。死が迫っているこ

とはその姿からもはつきりと分かる。身体が痙攣^{けいれん}を起こすため、ベッドで寝ていることができない。ベッドに戻せばまた、男は落ちなくてはならない。

〔十一〕 なぜか、男の肋骨^{ろっこう}の上には雑誌の付録にあるような小さなマンガがある。彼がそれを読んでいたのではない。このときすでに彼は発語と共に視力を奪われている。本は家族、知人の誰かが寝ていた彼のそばにおいたのかもしれないが、男は不自由な身体でようやく、マンガ本をついたてのよう自分の身の上に立てたのだった。そうすることで半開きのドアから自分の姿が見えないようにしていたのである。

〔十二〕 この姿を見て石牟礼は、自分の姿を誰にも見られたくないという、尊厳を重んじる男の祈りにも似た気持ちを認識する。男も漁師だった。荒ぶる自然と生きていることが彼の誇りだった。

〔十三〕 だが、肋骨の上のマンガは安定していない。〔イ〕倒れ、落ちる。すると〔ウ〕彼の敵意は拡散し、ものいわぬ稚ない鹿か山羊^{やぎ}のような、頼りなくなかなげな眸^{ひとみ}の色に変化^{ひんか}した。怒っている、この男は「苦痛を表明するよりも怒りを表明して」いる、と石牟礼は感じる。さらに彼女は、視力を失ったはずの男から投げかけられる強い視線に気が付く。石牟礼は「見えない目でわたくしを見た」と書いている。

〔十四〕 視線を感じることはある。だが、視線を見ることはできない。見えなくなった目からも視線は放射されている。より強い、コトバと化した視線を石牟礼は全身で感じる。二人の間では、視線がコトバとなる。

〔十五〕 受けとめる相手さえいれば、あらゆる行為は〔X〕となる。絶望する友の肩を叩く^{たた}行為もコトバであり、悲しみに我を失う者を抱きしめるのもコトバである。水俣病に関するどんな詳細な記述も、この男が感じているままに述べることはできない。男も石牟礼の視線を感じたのだろう。「このとき釜鶴松の死につつあったまなざしは、まさに魂魄^{こんぱく}この世にとどまり、決して安らかになど往生しきれぬまなざしであった」と彼女は書き記している。

〔十六〕 真実は、社会的にはほとんど無力に等しいこの男のまなざしによって明らかにされている。それは〔Y〕では語られることはないが、生きられている。そのときの様子を彼女はこう綴^{つづ}っている。

この日はことにわたくしは自分が人間であることの嫌悪感に、耐えがたかった。釜鶴松のかなしげな山羊のような、魚のような瞳と流木じみた姿態と、決して往生できない魂魄は、この日から全部わたくしの中に移り住んだ。
〔『苦海浄上』〕

〔十七〕 真の語り手は自分ではないと明示するところから『苦海浄土』は始まっている。ここで語られているのは比喩ではない。描き出されているのは献身の道程である。一つ、また一つとコトバを感じるのではなく、わが身を〔Z〕が顕われる場所に差し出そうとする。

〔十八〕 この作品を書くまで石牟礼は、文学に関心を寄せていた一介の主婦だった。ときおりエッセイや短歌を雑誌に投稿することはあっても、書くことを生活の中心においていたのではなかった。だが、容易に言葉にすることができない悲劇が世界を襲うとき、大いなる者は人を選び、その口をもつて語らせることがある。

〔十九〕 旧約聖書の時代にはそうした人びとは預言者と呼ばれた。あるところでは巫者^{注2 ふしや}と呼ばれ、ある時代には詩人がその役割をになった。聖書では、神から呼び出されることを意味する召命〔vocation〕という。この作品を貫くのも召命の軌跡にほかならない。その自覚は彼女にもあった。

（若松英輔『生きる哲学』より）

注

- 1 残滓……食べたあとに残るかす。
- 2 巫者……神に仕える人。神意をうかがい、それを人々に伝える、神と人間とのなかだちをする人。

問一 傍線部 a ～ c のカタカナ部分と同じ漢字を含む熟語を、次の中からそれぞれ一つ選びなさい。解答は a ～ c の順にマーク用解答用紙の 16 にマークしなさい。

- | | | | | | |
|---|------|------|------|------|------|
| a | ① 左脳 | ② 調査 | ③ 操作 | ④ 示唆 | ⑤ 詐称 |
| b | ① 軽侮 | ② 憎悪 | ③ 蔑称 | ④ 屈辱 | ⑤ 遺恨 |
| c | ① 耐久 | ② 残酷 | ③ 惨忍 | ④ 辛辣 | ⑤ 堪能 |

問二 空欄 ア ～ ウ に入る最も適切な語を、次の中から一つずつ選びなさい。解答はア～ウの順にマーク用解答用紙の 19 ～ 21 にマークしなさい。

- | | | | | | | | | | |
|---|------|---|------|---|------|---|------|---|------|
| ① | しばしば | ② | まじまじ | ③ | まちまち | ④ | たちまち | ⑤ | なかなか |
| ⑥ | ばったり | | | | | | | | |

問三 本文中には次の段落が抜けている。この段落はいずれの段落の後に続くのが最も適切か。該当する段落を次の中から選びなさい。解答はマーク用解答用紙の 22 にマークしなさい。

- | | | | | | | | |
|---|------|---|------|---|------|---|------|
| ① | 一 段落 | ② | 二 段落 | ③ | 三 段落 | ④ | 四 段落 |
| ⑤ | 五 段落 | ⑥ | 六 段落 | ⑦ | 七 段落 | ⑧ | 八 段落 |

罹患した人々は、著しく神経を傷つけられ、身体を奪われる。手足ばかりか、身体もねじれて、視聴覚を失い、話すこともできなくなり、ついには死に至る。水俣病がいつから起こり始めたのか、今でも精確には分からない。ただし、国がそれを正式に認めるずっと以前から、多くの人々がその苦痛を背負わなくてはならなかった事実が動かない。正式に国が水俣病を公害として認めたのは一九六八年、水俣病が強く疑われる患者が発見されてから十五年以上の歳月が経過していた。

問四 傍線部Ⅰに「こうした言葉は知解されることを拒んでいる。表記文字の奥に潜む律動を感じることを求める」とあるが、その理由として最も適切なものを、次の中から一つ選びなさい。解答はマーク用解答用紙の **23** にマークしなさい。

- ① 言葉の表面的な意味だけでなく、その背後にある言葉にならない深い感情や機微を捉えようとしなければ、その意思を捉えることができないため
- ② 言葉の表面的な意味だけでなく、ジェスチャーのような身体的言語表現を加えなければ、適切な言語表現ができないため
- ③ 言葉の表面的な意味だけでなく、流ちょうに語られるリズムや拍を捉えようとしなければ、意図を捉えることができないため
- ④ 言葉の表面的な意味だけでなく、用いられている言葉の歴史や起源を理解しなければ、適切な言語表現ができないため
- ⑤ 言葉の表面的な意味だけでなく、音声言語から文字言語への大きな転換を図らなければ、意思を捉えることは出来ないため

問五 傍線部Ⅱに「言葉をコトバの次元に深化させること、あるいはコトバとして顕現した言葉にならない魂の叫びを言葉に刻みこむこと」とあるが、それぞれの事例として挙げられているもの説明として最も適切なものを、次の中から一つ選びなさい。解答はマーク用解答用紙の **24** にマークしなさい。

- ① 「ゆき」と「釜鶴松」の事例はどちらも「言葉をコトバの次元に深化させること」に該当する
- ② 「ゆき」と「釜鶴松」の事例はどちらも「コトバとして顕現した言葉にならない魂の叫びを言葉に刻むこと」に該当する
- ③ 「ゆき」の事例は「言葉をコトバの次元に深化させること」に該当し、「釜鶴松」の事例は「コトバとして顕現した言葉にならない魂の叫びを言葉に刻むこと」に該当する
- ④ 「ゆき」の事例は「コトバとして顕現した言葉にならない魂の叫びを言葉に刻むこと」に該当し、「釜鶴松」の事例は「言葉をコトバの次元に深化させること」に該当する
- ⑤ 「ゆき」と「釜鶴松」の事例は「言葉をコトバの次元に深化させること」にも「コトバとして顕現した言葉にならない魂の叫びを言葉に刻むこと」にも該当しない

問六 傍線部Ⅲに「コトバとの遭遇」とあるが、石牟礼が遭遇した「コトバ」として適切ではないものを、次の中から一つ選びなさい。解答はマーク用解答用紙の **25** にマークしなさい。

- ① 視力を失ったはずの釜鶴松から投げかけられる強い視線
- ② 水俣病の現実を物語っている罹患者の苦しむ姿
- ③ 自分のものであるように死を見つめようとする釜鶴松の散大したまなこ
- ④ 水俣病に関する詳細な記述や調査
- ⑤ 「ゆき」と同質の言葉になろうとしない数知れない罹患者の呻き

問七 空欄 X Z に入る語句の組み合わせとして最も適切なものを、次の中から一つ選
びなさい。解答は、マーク用解答用紙の 26 にマークしなさい。

- | | | | | | | |
|---|----------------------------|-----|---|-----|---|-----|
| ① | <input type="checkbox"/> X | コトバ | Y | コトバ | Z | コトバ |
| ② | <input type="checkbox"/> X | 言葉 | Y | コトバ | Z | コトバ |
| ③ | <input type="checkbox"/> X | 言葉 | Y | コトバ | Z | 言葉 |
| ④ | <input type="checkbox"/> X | 言葉 | Y | 言葉 | Z | 言葉 |
| ⑤ | <input type="checkbox"/> X | コトバ | Y | 言葉 | Z | 言葉 |
| ⑥ | <input type="checkbox"/> X | コトバ | Y | 言葉 | Z | コトバ |

「問題三」 次の各問いに答えなさい。

問一 次の A ～ E は四字熟語の前半の部分である。正しい四字熟語となるように、後に続く二字を後の〈語群〉の中から一つずつ選びなさい。解答は A ～ E の順にマーク用解答用紙の にマークしなさい。

- A 一蓮いちれん B 臥薪がしん C 付和 D 捲土けんど E 泰然

〈語群〉

- ① 自若 ② 雷同 ③ 重来 ④ 嘗胆しょうたん ⑤ 托生たくしょう
⑥ 曲学 ⑦ 応報 ⑧ 玉条 ⑨ 暮改 ⑩ 与奪

問二 次の一文の傍線部 A ～ オ の品詞を、後の〈語群〉の中から一つずつ選びなさい。ただし、各選択肢は一度しか選べないものとする。解答は A ～ オ の順にマーク用解答用紙の にマークしなさい。

道がつづら折りになって、アいよいよ天城峠に近づいたとイ思う頃、ウ雨足が杉の密林を白く染めエながら、オすさまじい早さで麓から私を追ってきた。

(川端康成『伊豆の踊子』より)

〈語群〉

- ① 動詞 ② 形容詞 ③ 形容動詞 ④ 名詞 ⑤ 副詞
⑥ 連体詞 ⑦ 接続詞 ⑧ 感動詞 ⑨ 助動詞 ⑩ 助詞

